大阪での出来事　鹿児島編

大阪から鹿児島へ帰ってからの物語です。三部作の最終編になります。

さくらじまゆうすい

第一章～その１～

　大阪から鹿児島へ引っ越してきて一週間が経った。朝目が覚めてテレビを点けると、神戸の街が燃えていた。阪神淡路大震災だった。
　俺がいた大阪には大きな被害はなかったが、神戸にも何回も出かけ、思い入れのある街だった。その神戸の街が崩れ落ちている。俺は愕然とした。しかも俺が大阪から戻ってきて、わずか一週間後のことだった。
　鹿児島へ引っ越してきて神戸の街に対して何もできることはなかった。ボランティアに行こうにも俺はその時精神的におかしな状態だった。俺はせめてもと思い、毛布や湯沸かし器を段ボール箱に詰め込んで、神戸市へ送った。送料は無料だった。
　テレビのリモコンのチャンネルを替えても、地震の特集ばかりをやっている。俺はじっとテレビを見ていてもおかしくなりそうだったので、自家用車であちらこちら走り回った。これは精神的におかしかったせいもある。とにかくじっとしていられない。その時はまだ病院で診察を受けていないころだった。
　やはり、幻聴は聞こえるし、皮膚が震えたり体毛が逆立つような幻覚がある。後で聞いた話だが、家族は早く病院に俺を連れて行きたかったようだった。俺はそんな記憶もなかった。
　ただ、ある日父からきつくこう言われた。
「明日、一緒に病院に行ってくれ」
「いや、俺はいい。俺もカウンセリングにかかったり、さんざんそういうことはやってきたんだ。それでもよくならなかった。病院に行ったって同じだよ。だから俺は行かない」
「いや、今度だけはどうしても一緒に行ってくれ。今度のところは病院じゃなくて精神保健福祉センターという県の施設だ。すぐに入院させられることもないだろう。だから頼む。一緒に行ってくれ」
「わかった、試しに行ってみるよ」
　俺は今度はどうしても一緒に行ってくれという言葉に推されて病院に行くことにした。しかし、精神科の病院など何をされるかわからないと思い込んでいた。これも医学や薬を否定する宗教に洗脳された影響が強かった。

　翌日、父と一緒に県の精神福祉保健センターに行ってみた。最初は先生ではなく、職員の方からどういう症状なのか、問診を受けた。これであらかじめどういう病気なのか知ることができるのだろう。その後は、先生の診察の順番が回ってくるまで待合室で待たされた。
「藤坂さんどうぞ」
　俺はいよいよ診察を受ける順番が来た。診察室はどんなところだろうと思っていたら、机と椅子を置いているだけの実にシンプルな部屋だった。器具や薬品などは全く置かれてなかった。
「それで、どういう症状があるのですか？」
「聞こえるはずのない声が聞こえてきたりするんです」
「テレビが自分に当てつけて言っているように聞こえてきたりとか？」
　俺はずばりと言い当てられた。こんなことを言う人は初めてだった。
「ええ、そうです」
「典型的です、典型的です。まあ、処方箋を書いておきますから、近くの調剤薬局で薬をもらって飲んでください。あと、お父さんの方は少しここで話をさせてもらえますか。今後のことを相談したいので」
　病名こそ言われなかったが、どうやら俺は典型的な精神病者らしい。それと、先生と父が二人で何を話しているのか気になった。十分間ぐらい待合室で待っていると、父が診察室から出てきた。
「先生はなんて言ってたの？」
「まあ、すぐには治るような病気じゃないから、長いことかかって治すつもりで治療にあたろうということだったよ」
　俺たちはそのまま歩いて、近くの調剤薬局へ行った。薬は二週間分出された。もう一度センターに戻り、駐車場に止めてあった車で家へ帰ることにした。途中のレストランで昼食を食べることにした。
「じゃあ、試しに一錠だけ飲んでみるから、いいか？」
「うん」
　俺は薬袋ごと席に持ってきていた。毎食後何錠か薬が入っていたが、その中の一錠だけ選んで飲んでみることにした。『薬は毒だ』という宗教団体の馬鹿な教えが、まだ俺の心を警戒させていた。しかし、その日の夕食後から飲み忘れることもあったが、なるべく薬は飲むようにした。
　それからは薬を飲みながら、自家用車でどこかへ出かけるような生活が続いた。ただ、遠出してもその日の内には必ず帰っていた。まだ、そのころは幻聴や妄想は治まっていなかった。テレビでは相変わらず、阪神淡路大震災の特集番組ばかりを放送していた。

第一章～その３～

　俺は大阪にいたころから時々、中学の同級生の男友達と連絡を取っていた。その村崎という友人は沖縄にいる。沖縄の大学を卒業した後、そのまま沖縄に残っているらしい。俺の方からだったか、村崎の方からだったか忘れたが、一度沖縄まで遊びに来いよということになった。俺は一応父に沖縄に行って来ていいか尋ねた。
「沖縄に村崎って友達いるだろう。今度沖縄に行って来てもいいか？」
「うん、村崎君ならいいだろう」
　俺は電話で飛行機のチケットの予約を取った。日付も時間も決まったので、鹿児島空港まで家族に送ってもらった。大阪からも飛行機で帰ってきたので、飛行機に乗るのはこの年は二度目だった。
　那覇空港に向かう前に村崎とは場所と時間を指定して待ち合わせをしていた。しかし、飛行機の到着が何十分か遅れた。それに慣れない土地だったので、待ち合わせの場所まで行く方法を知らなかった。とりあえずバスターミナルまで、バスに乗ることにした。すでにその時点で約束の時間から遅れていた。
　バスターミナルから歩いて待ち合わせ場所まで行ったが、村崎の姿はなかった。なにしろまだ携帯電話が一般的に普及する以前の話だ。どこでどうしているのか連絡の取りようがなかった。
　俺は通りすがりの人に交番の場所を訊いて、村崎のアパートまで向かうことにした。そしたら、交番ではなく沖縄県警の本部の方が近いですよと指を差された。俺はその通り県警本部まで歩いて行った。
　県警本部の受付の人に訊いてみると、一旦普天間交番に行ってから、村崎のアパートを尋ねた方がいいと言われた。その普天間交番の場所がわからなかったので、またバスターミナルから何番のバスに乗るといいですよとか説明を受けた。
　俺は他に頼るところもないので、言われた通り普天間までバスで向かった。バスに乗っている間に日が沈んで辺りは暗くなっていた。そして、普天間交番の前のバス停で降りた。交番をのぞくと誰も警官らしい姿はなかった。しかし、その後すぐに一人制服を着た警官がやってきた。
「どうかされましたか？」
「ええ、友人宅に行きたいんですけど、どうやって行っていいのかわからなくて」
「住所はどこになってますか」
　俺は手帳を広げて村崎の住所と電話番号も知らせた。すると村崎の部屋の電話に連絡をしてもらった。会話の内容からすると、なぜ普天間まで行ったのかわからないようだった。とにかくタクシーを呼ぶから、タクシーで村崎のアパートまで行ってくれということになった。制服の警官はタクシー会社にも連絡してくれた。タクシーは五分も経たないうちに交番の前に現れた。俺はタクシーに乗り込んだ。

　普天間交番からタクシーは５分間ほどで、村崎が住んでいるアパートの前に到着した。タクシーの料金は、待ち合わせ場所に待機していなかったことを気兼ねしていたのか、村崎が全額支払ってくれた。
　タクシーを降りてアパートの階段を登って、二階にある村崎の部屋へ入った。村崎の部屋は家賃は一万円台と言っていた。風呂は湯船がなく、シャワーしかついていないのが沖縄では一般的らしい。もちろんトイレは各部屋についている。
　俺は村崎とも話し合って二泊ほど部屋に居候させてもらうことになった。その夜は夕食を購入するため近くのコンビニに行った。俺は弁当を買ってまた二人で部屋へ戻った。
「お前、沖縄に引っ越してくる気はないか？」
　二人で弁当を食べていると、唐突にそんなことを言われた。
「沖縄に？沖縄か」
「うん、そうだ。俺がやりたいことがあってね。それを手伝って欲しいんだ」
「そうか。うん、悪い話じゃないな。実は俺も大阪から実家へ戻ったのはいいけど困ってるんだ。家が居心地が悪くてね。暇があれば車であちこち走り回ってるんだ。できれば家から出ていきたいって思ってたから」
「ああそうか。それなら話は早いや。こっちへ引っ越して来いよ」
　その後、沖縄への脱出計画について村崎と話し合った。まず俺が住む部屋を探さないといけない。それと仕事だ。収入もないのに一人で住むことなんてできない。当面の問題はその二つだった。
　それから村崎が沖縄でどう過ごしていたかを話し始めた。奴が鹿児島から沖縄へ出て行ったのは、大学への進学のためだった。大学は卒業したのだが、なぜか就職活動は行わなかったらしい。「先が見えるのが嫌だった」というわけのわからない理由を付けていた。
　あとで聞いた話だが、村崎は成績優秀で学位を取り、大学の職員にならないかと誘われたらしい。つまり大学教授にもなれたかもしれない存在だった。それが、就職もせず家庭教師など不安定な職業をやってなんとか食いつないでいるらしい。俺は大学は中退したが、貧乏な点では俺と大差はない。
　俺はその日のうちに鹿児島の両親に電話をかけた。沖縄へ引っ越すと言ったら、いきなりの話だったせいか反対された。一番の問題は俺の病気だった。まだセンターに通い始めたばかりで、病状もそれほど改善されたわけでもなかった。だから、鹿児島へとにかく帰って来いと言われた。しかし、俺は実家にいるのがとにかくいやで、鹿児島市内にでも引っ越そうと考えていたぐらいだった。村崎が沖縄に引っ越して来いと提案したのは好都合だった。俺は、しばらく沖縄にとどまることだけ伝えた。

翌日、沖縄で部屋を探すために不動産屋さんに行ってみた。すると家族が保証人にならなければ部屋は貸すことができないと言われた。両親は沖縄に引っ越すことには反対している。なんとか親を説得するしかないようだ。

その後、村崎のアパートの近所を歩き回った。図書館とか本屋さんとかレンタルビデオ店などがあった。昼食はハンバーガーショップで食べた。多少、道路がややこしいのが気になったが、引っ越してくるには悪くない環境に思えた。

沖縄にいても幻覚や妄想があることにはかわりがなかった。やはり簡単に治るような病気ではなさそうだ。もしかしたら沖縄に引っ越しても病気の症状はよくならないかもしれない。しかし、俺はこの状態を何とかしなければと焦っていた。

その夜、鹿児島の両親から電話がかかっていた。やはり俺は沖縄に引っ越すつもりでいた。しかし、両親からの提案は鹿児島市内なら部屋を借りて引っ越してもいいということだった。俺は少し迷ったが、家から出ていけることにはかわりはない。村崎の方は沖縄に来て欲しそうだったが、最終的には俺が決めることだ。鹿児島市内に引っ越すという両親の申し出を受け入れることにした。

その日のうちに航空券を予約し、鹿児島へ帰った。鹿児島空港まではまた車で迎えに来てもらった。近いうちに鹿児島市内の不動産屋さんに行って部屋を探そうと話をした。

その何日後だっただろか、鹿児島市内の不動産屋さんに行った。その時不思議なことが起こった。四六時中と言っていいほど聞こえていた幻聴がすうっと消えていった。それは不動産屋さんのドアを開け、店舗内に入ってからだった。幻聴からも解放され、妄想も起こらなくなった。

部屋探しの方はいい条件の部屋があったので、その部屋の大家さんを読んで話し合いになった。すると、俺が無職の立場なので借主は俺の親になってもらい、他に保証人を探して欲しいということだった。

いったん家に帰り、保証人を親戚に引き受けてもらった。家まで来てもらい、契約書に印鑑を押してもらった。

俺はなぜかわからないが無気力になっていた。あれだけひどかった幻聴、幻覚が消えてしまい、楽になるはずが気分は沈んでいた。後で統合失調症に関する本を読むと、幻覚や妄想のひどい状態が陽性症状で、陽性症状がおとなしくなると、気分が沈むような陰性症状に変わると書かれてあった。やはり、俺は典型的な統合失調症であることには間違いないようだ。

それから、鹿児島市内に一人で住むことになった。しかし、その暮らしも二週間ぐらいしか続かなかった。

第二章～その１～

　俺の希望通り家から引っ越すことはできた。しかし問題は病気の陰性症状の方だった。俺は仕事を探さなければならないと思いあちこち面接を受けたが、ことごとく採用されなかった。陰性症状の気力のなさがわかってしまうのだろう。それに、体調もすぐれなかった。とうとう食べたものも吐いてしまった。俺はそのとき「もう一人暮らしは続けられないな」と思った。
　俺の両親は県内に住んでいるせいもあって、何日かに一回は市内のアパートに様子を見に来ていた。俺は今の状態では一人で暮らしていくのは無理だと思っていたので、実家の方へ戻ると告げた。両親もいかにも実家の方へ帰って欲しそうにしていたので、たった二週間しか住んでいない部屋から実家へ戻ることをすぐに承知した。
　それから実家の部屋へ戻った。荷物は少しずつ運んで行った。実家に帰っても陰性症状はあまり回復しなかった。本当に無気力になった。恥ずかしい話になるが、自慰さえする気力が起こらなかった。つまり性欲さえなくなってしまったのだ。そのことは主治医の先生にも誰にも相談しなかった。別に相談する必要もないだろうとも思ったからだ。
　しかし、幻聴や幻覚に悩まされ、ひどい妄想で苦しめられていた陽性症状よりはずいぶんましだと思った。周りの人たちにもあまり迷惑をかけなくなったし、俺も周囲の人たちを信頼して過ごせるようになった。
　そのころ、どう過ごしていたのかよく覚えていない。たまにお小遣いをもらう程度で、あまり買い物とかにも出かけていなかった。それに性欲さえ失い、自慰をしない期間が一年か二年間は続いた。本当に無気力に生きているだけという月日が過ぎていった。
　少し思い出してきたが、そのころの楽しみと言えばテレビを見ることぐらいだっただろう。ニュースやドラマやバラエティー、スポーツ、いろんな番組を見ていた。
　それと、悩みと言えば薬の副作用で顎が震えることだった。とにかく何もしていなくても顎ががたがたと音を鳴らしながら震えた。主治医の先生にそのことを相談すると、薬を少しずつ変えてもらい、顎の震えは少しずつ軽くなっていき、日常生活には困らない程度になった。
　無気力で自慰さえする性欲さえ起らないが、平和な日々が続いた。しかし、その陰性症状も少しずつ改善されてきた。それも一年以上かかった。久しぶりに手淫をやってみた。いくことはいったが、精液が一滴も出なかった。俺は夢精などしない体質なので、たまった精液は自慰によって出すしかなかった。しかし、一年以上も体の機能を使ってないとそこまで衰えてしまうことを知ってしまった。
　しかし、何日か手淫をすると、少しずつ精液が出てくるようになった。精液の量は少しずつ増していき、最終的には以前と同じぐらいまでになった。俺はほっとした。
　陰性症状が軽くなったのはよかったが、今度は逆の陽性症状が戻ってきた。また以前の地獄の苦しみを味わうことになった。

第二章～その２～

　陽性症状がまたひどくなったきっかけはバスに乗っているときだった。陰性症状しか出ていない時にも、また陽性症状が出てきたらどうしようという不安は持っていた。それが同じバスに乗っている人たちに俺の考えていることが伝わったらどうしようという不安になって、ついに妄想が再び返ってきた。
　その妄想は以前のように周りの人たちがまるで俺のことを知っていて陰口を言っている。俺の考えていることが伝わってしまう。そんな恐ろしい妄想が再び出始めた。
　そして、幻聴や幻覚もひどくなった。人の声は聞こえるし、味やにおいでくることもある。一番嫌なのが体感幻覚という皮膚の感覚の幻覚だ。体毛が逆立ったり、皮膚が振動しているような幻覚が出てくる。そして、その体感幻覚をまた大阪にいるはずのナオさんのせいにしてしまった。
　なぜ、鹿児島にいるのに大阪に離れている人の感覚が伝わってくるのかはわからない。でも、確実に言えることはそれは幻であって、現実ではないということだ。しかし、幻である幻覚も毎日のように出てくると誰かのせいにしないといられなくなった。俺はナオさんを恨んでしまった。幻覚の原因がナオさんである証拠は一つもない。しかし、声まで聞こえてくる。本当にただの幻だとしても他の原因があるかもしれない。しかし、俺の思い込みは消えなかった。すべて幻覚で苦しんでいるのをナオさんのせいにしてしまった。
　幻聴でナオさんと会話することもあった。声から察すると俺のことを相当恨んでいるらしい。俺もナオさんのことを恨むようになってしまった。幻覚の原因が何か全く証拠もないのに、誰かのせいにしてしまった。今ではそのことを大変後悔している。幻覚は幻であって、現実ではない。
　そんなある日、布団の上で横になって休んでいると、また皮膚の幻覚が現れ始めた。体毛は逆立つし、皮膚はぶるぶると震える。またナオさんのせいにしてしまった。俺は頭の中でこう思った。
『本当はいい人の癖に』
　そう思ったとたんに何か今までにない不思議な感覚になった。そして、ナオさんに似ている霊が俺の横に出てきた。そして、俺の左半身、特に左腕がひどく重い感覚になった。確実に言えることはそれも幻だということだ。
　ナオさんの幻は俺と目が合うとすぐに消えてしまった。顔は目と口がぽっかりと穴が開いたような感じだった。幻は消えても腕の重さは消えなかった、腕が普通の状態に戻るまで数週間はかかったと思う。腕は痛みはなく普通に動かすことはできたが、とにかく重いとしか表現しようがなかった。
『ナオさんが死んだ』
　俺はそうとしか考えられなかった。それから俺は何かに取りつかれたように考え方もネガティブになり、自殺願望も出てきた。「何かきっかけがあったら死のう」少なくとも一年間以上はそう思うようになっていた。

　それからは地獄の始まりだった。とにかくネガティブにしか考えられなくなった。漠然と『何かきっかけがあったら死のう』そんなことしか考えていなかった。
　ナオさんが霊となって出てきたといっても、果たして生きているのか本当に亡くなったのか、住所も電話番号もわからない状態で確認しようもなかった。幻の世界ではあるが、現実としか思えないほど、俺の心は弱くなっていた。
　ナオさんの霊が見えてから一年以上が経過し、ようやく自殺願望も弱まってきた。そのあいだも病院に通い、服薬は続けていた。精神病になって仕事をすることもできないので、障害者基礎年金を受け取って現在も生活を続けている。それでもネガティブに考える癖は次第に薄れてはきた。
　俺は最近になって以前大阪にいたときに通っていた宗教団体にも手紙を出してみた。それは病気のせいで周りの方々に迷惑をかけたことと、ナオさんが健在なのか、それとも本当に死んでしまったのか確認するためだった。しかし、二度にわたって送ったお詫びの手紙に返事は返って来なかった。
　返事が来なかった理由はよくわからない。あの頃迷惑をかけたせいか、私が精神病者だということを知らせたせいか、もう鹿児島にあるその宗教の集会所にも顔を出さず、完全にその宗教をやめてしまったせいかよく理由はわからない。もしかしたらナオさんは幻ではなく本当に亡くなって霊となって俺の目の前に姿を現したのかもしれない。とにかくナオさんの幻をこの目で見てから、俺の人生はろくなものじゃなかった。
　とにかく周りの人間が俺のことをいじめているようで、ひどい被害妄想にとりつかれた。周りの人間も信じられないし、自分自身も信じられなかった。幻覚、幻聴、妄想も続いた。自殺もしようとして思いとどまったこともあった。
　だんだん人に心を開けるようになってきたのはつい最近のことだ。女の人に恋心も持てるようになった。少しずつ人生を楽しむようになってきた。地味にしか生きてこなかったが、お金をかけなくてもおしゃれにも気を付けるようにもなってきた。ネックレスやピンキーリングも身に着けている。特にピンキーリングを着けてから恋をするようになれた。少しずつ人も信用できるようになってきた。
　今は、在宅でできる仕事はできないか探しているところだ。もしナオさんが本当に命を絶ったとしたら、最近になってようやく私のことを許してくれるようになったのかもしれない。心の中でナオさんの幸せを願うようにしている。とにかくあのころはまだ若かった。人を一旦恨むと許すこともできなかった。今ならどんなひどい目に遭わされても人を許すことができると思う。
　憎しみからは何も生まれない。人を許すこと。俺はこの人生で学んだことでは一番大きなことだったと思う。恨んだり憎んだりすれば本当に人を殺すようなことも起こりうる。人を許して、人を愛せるようになったらどんなにすばらしいことだろう。俺は四十代になってようやくそんなことに気づいた。
　人生まだまだこれからだ。何年、何十年生きられるかはわからないが、もっと人々も自分自身

も愛せるような人間になりたい。そう願うことにしている。そして、ナオさんも生きていても、もし死んでしまったとしてもぜひ幸せになってほしい。だから、あなたのことは一生忘れません。

大阪での出来事　鹿児島編１

http://p.booklog.jp/book/57342

著者：さくらじまゆうすい
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/dpmpct5160/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/57342

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/57342

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ